

秘密基地での思い出

学校法人扇城学園 東九州龍谷高等学校 3年

ふじいかのん
藤井 花音

「花音ちゃん、最近、珍しい観光列車が通り出したから見に行こう。」

私が小学校高学年のときの祖母の誘いがきっかけで、私は観光列車に興味を持つようになった。祖母が言っていた観光列車は当時、久大本線が豪雨による被害のため日豊本線を通っていた「ゆふいんの森号」。優しいエメラルドグリーンを基調とした普通の電車と違って丸みを帯びた見た目に新鮮さを覚え、私はだんだん魅了されていったのだった。

それからというもの、祖母の家に行く度に妹と祖母と3人である場所まで行って、毎日定刻に通る「ゆふいんの森号」を見に行くようになった。ある場所とは、普段あまり人が足を運ばないような、祖母の家から少し歩いた、線路から数十メートル離れていて回りに草が生い茂った小道だ。どうやらこの場所は私と妹が学校に行っている間に、祖母が孫を喜ばせるために研究を重ねて見つけてくれた絶景スポットらしい。

「この場所は他の場所と比べて景色が開けているから長い時間見れるし、カーブがあるから列車も減速するんよ。」

と自慢げに祖母はよく言っていた。そして、私と妹と祖母だけの「大きな秘密基地」は3人にとって特別な場所となったのだ。私と妹はいつもこの場所で、列車が通ると

「ゆふいーん！ゆふいーん！」

と叫んで大きく手を振った。列車内でも私達の声が聞こえていたかのように手を振って下さる方もいた。さらには時々、運転手の方でさえ、軽く手を振って下さり、手を振って下さりながら汽笛を鳴らしてくれたりして、ゆふいんの森のおもてなしに私達はやりがいを感じ、カラフルなうちわを振ったりして、まるで私達が「ゆふいんの森」というアイドルのファンであるかのようになった。その時はいつもは閑静な「大きな秘密基地」はライブ会場に変わったようだった。3人で、大きな秘密基地でゆふいんの森号を見る事は私にとって、平日の学校を頑張れる理由であり、ずっと楽しく思っていた。

でも、その楽しみはずっと続かなかった。

「なぜか昨日もおとといも、ゆふいんが通らなかつたんだけど何かあったのかな？」

ある日、祖母はそう言って電話をしてくれた。母は原因を調べてくれた。

「久大本線が復興したんだって。残念けどもう日豊本線は通らないかもね。」

私は信じる事ができなかった。その休日、秘密基地に行ってみたが定刻を過ぎてもゆふいんの森号が通ることはなかった。ものすごい喪失感に襲われ、家に帰った。久大本線の復興、ゆふいんの森号との別れという複雑な感情が心を支配した。せめて日豊本線を通る最終日に別れのあいさつで手を振れたら…当時スマホを持っておらず日付も知らなかった私はとても後悔した。

しばらくたって母が提案した。

「ねえ。ゆふいんの森に乗りに行かない？」

と。私達3人は目に輝きを取り戻し、私は初の観光列車を「ゆふいんの森号」で体験することになった。間近で見ると思っていた以上にきれいで再び会えたことで嬉し涙が出そうだった。これは私にとって一生忘れられない思い出だ。

私は今、高校3年生で、来年は大学生となり、ふるさとを出て行くつもりだ。もう二度と3人で「大きな秘密基地」で手を振ることはないかもしれない。でも、大きな秘密基地で手を振ったこと、ワクワク感や満足感は特別な思い出として決して忘れることはないだろう。日豊本線にたくさん観光列車が通るようになって、誰かが「大きな秘密基地」を見つけて、私達みたいに、喜んで受け継いでくれたら、私はとても幸せだ。